

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

王さまの話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001821



王
さ
ま
の
話

249 タサツラとトウルミンジャ

ある男に、子どもが二人いた。男には、娘と息子がいた。

さて、男は息子にウマをかってやった。男は娘におおきなおおきな駄瑯引きの容器をかってやった。男は子どもたちにそれぞれウマと駄瑯引きの容器をかってやると、やってきた。息子は草をかりにいくと、自分のウマにもってきてやる。娘はおおきな駄瑯引きの容器をもっている。

さて、日があがると、息子は妹に、「タサツラよ」という。娘はタサツラという。息子の名前はトウルミンジャという。息子が、「タサツラよ」というと、妹は、「はい」といった。息子は妹に、「おねがいだ。ぼくがでかけていっていないとき、ウマの喉がかわいたら、ウマに水をもっていっておくれ」という。息子はおきあがると、草をかりにいった。息子がかえってくるまでに、タサツラはウマに水をもっていつてやる。

さて、トウルミンジャはいつて、かえってくる。トウルミンジャはやってくると、「ぼくのウマのしたに草がちらかつてないように。ウマが水をのませてもらっているように」といった。タサツラは、「よろしい」という。トウルミンジャはでかけていき、家にかえってくる。

さて、ある日、トウルミンジャはでかけていき、かえってきた。

かえってくると、ウマが尿をたらし、糞をしていた。タサツラは糞をひらつていなかった。

さて、トウルミンジャは妹をよんだ。トウルミンジャは草をほつておいた。兄さんは妹に、「タサツラよ」といった。妹は返事をした。兄さんは、「ぼくがいつてしまい、おまえとウマをあとのこしておいた。ぼくは、ウマが糞をしたままにし、草をちらかしたままにしておかないように」といった。おまえは、どうしてそのままにしておいたのか」といった。妹は、「そんなことはない」といった。兄さんは、「なんだって、このウマは」という。

さて、妹は、「わたしがいわれたことをしないというの。そのとき、わたしは母さんと父さんの仕事をしていた。母さんと父さんに使いにだされていた」という。

さて、兄さんは、「よし」といった。

さて、兄さんは草をとると、タサツラをたたいた。兄さんはタサツラをたたいた。父親は息子に、「おまえさんはウマを大切にしながら。まるで、マイガリ・モルモルゴの王さまのようにあつかっているのではないか。人に迷惑をかけている。おまえさんは王さまとおもっているのか。女を矢で、男を弓で、つれてかえってくる人にしか、そんなことをいう資格はない」といった。

さて、息子はおこってしまった。

さて、トウルミンジャは、「よろしい」といつて、どこかにある

いていく。男の子はなっている。男の子は、もしアッラーがゆるさ
れ、死んでいなかったら、女を矢で、男を弓で、つれてかえって
くるマイガリ・モルモルゴのところに行くといった。マイガリ・モ
ルモルゴにほっておかれるか、自分よりつよく、自分をころしてしま
うか、自分がマイガリ・モルモルゴよりつよく、その男をころして
しまうかもしれないといった。男の子はおこつて、そうするのだと
いった。男の子は道があるいていく。どんどんあるいていく。

さて、人びとは男の子に、「どこにいく」といった。トゥルミン
ジャはいった。「自分は妹といっしょにすんでいた。父親が自分に
ウマをかつてくれ、妹におおきな磁瓶引きの容器をかつてくれた。
自分はウマの草をかりにいく。いつも、ウマの草をかるし、かっ
てきて、草をもつてかえってくる。自分は妹にウマの面倒をみる
ようにといった。でも、妹は自分のウマの世話をしなかった。家
にかえると、ウマが糞をしていた。それで、自分は妹をしかつた。自
分は、『どうして、こんなことをしてくれたのか』といった。そ
こで、自分は草をもち、タサツラを打つた。そこで、自分の父親は自
分に、『どうか、いかりをしずめなさい。どうして、男を弓で、女
を矢でもつてかえってくるマイガリ・モルモルゴのようにいかる
のか』といった。そういうことで、自分はマイガリ・モルモルゴと
いう人をみてるのだ、その人が自分より力があれば、ころされる
し、自分がその人より力があれば、その人をころす。いつてみなけ

ればならない」。人びとは、「アッラーがおまえさんに幸運をあたえ
られますように」といった。

さて、その人はトゥルミンジャにお金をやった。若者（トゥル
ミンジャ）はいってしまった。若者はどんなさきにすすんでいっ
た。

さて、ある日、若者はわたらなければならぬ川にちかづいた。

さて、若者がやってくると、老女がいた。老女がいた。若者は、
「母さん」という。老女は、「息子よ、きたの」といった。若者は、
「うん」といった。老女は、「おまえさんはどこからやってきたの
か」という。若者は、「わたしの村からやってきた」といった。

さて、老女は、「そうなの。ようこそ」といった。若者は、「母
さん、身をよせたいのだけれども、よいかい」といった。老女は、
「なんだって、わたしは年寄りなのに、王さまのところではなくわた
しのところに身をよせるといふのかい」といった。若者は、「わた
しは年寄りの女たちのところに身をよせるのだ」といった。老女
は、「よろしい。よかつたら、年寄りの女のところを身をよせたら
よい。わかるね。わたしをみなさい。わたしはゴミ捨て場からひろ
わなければ、食べ物をつべられないのだよ。場所があるとおもうの
か」といった。若者は、「そうかい。母さん、わたしはおまえさん
のところを身をよせたい」といった。

さて、若者はたちあがり、老女のところに行った。老女はいく

と、若者を自分のところにとめた。若者がいくと、わかるかな、この町では着物がたかかった。食べ物もたかかった。

さて、若者はいった。そこにつくと、「母さん、さむい。火をおくれ。火をもやすのだ」といった。老女は、「なんだって。まっとなさい。もっていくから」といった。

さて、老女は火にくべるための草をさがして、もってきた。薪はたかかった。

さて、若者は着物をあつめて、つんだ。着物に火をつけようというのだ。

さて、老女が、「息子よ」といった。

さて、老女がやってきた。若者は、「どうしたのか。母さん」といった。

さて、若者は、「これに、火をつけるのだ」といった。老女は、「火をつけるのかい。息子よ」という。若者は、「うん」という。老女は、「火をつけるのか。なにをもやすのか」という。若者は、「この着物をもやすのだ」という。

さて、老女は着物をだきかかえると、みんなとってしまい、「これをもやすのかい、息子よ」といった。若者は、「わたしたちのところでは、それをもやす」といった。老女は、「なんだって、息子よ、ここでは、この町の王さまだって、こんなものを手にいれられるとおもっているのかい。まして、わたしが手にいれられるわ

けはない」という。老女は着物をとると、いってしまい、草をもつてくると、若者にわたした。

さて、そのつぎの日にも、若者はいる。若者はまたしても、「母さん、水がほしい。水がのみたい」といった。

さて、老女は水をとると、若者にもつてきてやった。老女は若者にのむようにといった。

さて、若者は水をとった。

さて、若者は水をとると、そのなかにたくさんの砂糖をいれて、おいておいた。老女は、「息子よ、おまえさんはいま、なにをしたのか」といった。

さて、若者は、「こうして、のむのだ」といった。老女は、「なにをしようとしているのか」といった。若者は、「よろしい、わたしはいらぬ」といい、それを取り、老女にわたした。

さて、若者がいくと、老女がいた。

さて、老女は砂糖をみて、「なんと。みてみなさい。これはなんだろう。これをどこで手にいれたのだ」といった。若者は、「それは、わたしたちの村の砂だ」といった。老女は、「ふむ。わたしたちは、ここでは、こんなものをしらぬ」という。若者は、「母さん、味をみてみなさい」といった。老女は味をみた。

さて、老女は、「なんと、息子よ。こんなものがあるのかい」といった。若者は砂糖をとると、老女にやった。

さて、老女はでていった。

さて、老女はもどつてきて、若者に、「息子よ、よめさんがほしくないか。おまえさんは、こんな若者なのに」といった。若者は、「母さん、よめさんはいらぬ。わたしがほしいなら、だれがわたしにくれるというのだい」といった。老女は、「わたしはおまえさんに結婚してよい年頃の娘をつれてきてあげよう」といった。若者は、「わたしがのぞめば、よめさんを手にいれることができる。わたしは王さまのよめさんがほしい」といった。老女は、「王さまのよめさんだつて。王さまのよめさんだつて、おまえさんがあえるようにしてあげよう」といった。

さて、老女はよろよろとたちあがつた。たちあがると、砂糖をとり、おいておいた。若者は指輪をとると、瑠璃引きの容器にいれた。老女はやつてくると、綿をすこしと綿の紐をとり、おいておいた。老女はあるきながら、「紐、紐がある。綿、綿がある」といいながら、それをかう人をさがしている。人びとは、「その婆さんをおいはらえ。その婆さんをおいはらえ」という。老女は王さまの屋敷にいく。老女は、「なんだつて、わたしはたべるものをさがしている」といった。老女はいつてしまった。老女は王さまの屋敷にはいつていった。老女は王さまの屋敷のおくのほうにあるいていった。老女はそこにいた人たちに挨拶をした。そこにいた人たちは老女をむかえた。

さて、老女は、「わたしは王さまのよめさんにあうことができるかな。王さまのよめさんにわたしのことをいつてもらいたい」といった。そこにいた人が、「そこまでいつて、王さまのよめさんを見るつもりか」という。老女は、「わたしたちの売り物をもつていくのだ」といった。

さて、老女は屋敷のおくについた。そこにいた人たちは、「おまえさんの売り物をもつてこい」といった。老女は、「はいこれが、売り物だよ」といい、品物をもつていった。

さて、老女は王さまのよめさんのところにつくと、半截ヒヨウタンをあけて、「娘よ、おまえさんだけかな」という。王さまのよめさんは、「はい、母さん」といった。老女は、「そうかい。おまえさんがいるだけなのだな」といった。王さまのよめさんは、「はい。わたしがひとりいるだけ」といった。老女が、「ひとりだけかい」という。王さまのよめさんは、「はい」という。老女は、「ここに売り物がある」という。老女は半截ヒヨウタンをあけた。老女は、「おまえさんは、こんな指輪をみたことがあるかい」といった。王さまのよめさんは、「みたことがない。これはどこからきたの。母さん」といった。老女は、「よろしい、いつてあげよう。わたしのところに客がいる。あんな若者はどこにもいない」といった。老女は若者がもやそうとしていた布をとった。老女は、「みてみなさい。こんなものをみたことがあるかい。よろしい、いつてあげよう。わ

たしの客はこれをもやす」という。老女は砂糖をもち、「おまえさんはこんなものをみたことがあるかい」という。王さまのよめさんは、「わたしは、そんなものをどこで見られるというの」といった。老女は、「王さまのよめさんでもみられないのかい。わたしの客はこれを水にいれてのむ。それは、わたしの客の指輪だ」という。老女は、「あの人はおまえさんのことをきいている。わたしはよめさんをさがしてあげるといった。あの人は、わたしに（普通の）よめさんを手にいれてもらわなくてよいといった。とういのは、あの人はおまえさんのような人しかいらぬのだ。おまえさんのような人のほか、だれもいらぬのだ。わたしはおまえさんに損をさせない。このような指輪がほしくないのかい」といった。王さまのよめさんは、「なんだって、母さん。わたしはどうしたらその人にあえるの」といった。老女は、「わからぬ」といった。王さまのよめさんは、「わたしはどうしたらその人にあえるの」といった。老女は、「あう方法はある。あわせてあげよう」といった。

さて、老女は、「よろしい。くるから。よかつたら、おまえさんのところまで、つれてきてあげよう。さて、それでは、おまえさんが王さまのところに行かない日まで、さようなら」といった。女は、「わたしが王さまのところに行かなくてよい方法がある。わたしは王さまのところにいかない。王さまがきたら、わたしは病氣だというつもり。王さまがいつてしまうと、そのつぎの日には、わ

たしが王さまとねる日になる。でも、王さまがこないようにする方法はある」といった。老女は、「どうしたら、おまえさんは王さまとわかれられるのか」といった。女は、「王さまとわかれる。こんな若者にあわずにおられるかい」といった。つぎの日、老女はやってくると、またしても品物をあつめた。老女はでかけていった。老女は指輪をとり、指輪を若者にかえず方法がないので、おいておくといった。男が王さまのよめさんにあいたいのなら、自分でいくがよいといった。女は老女に、「おねがい。その人をつれてきておくれ。王さまが家来たちのところにいくと、自分は門番たちという。門番たちにうまくいい、老女がきたらとおすようにといっておく」といった。王さまの屋敷の入り口にいる奴隷たちに、いっておくという。老女がその男とやってきても、とめてはならない、老女がっているのは、老女の姉妹だから、とめてはならないということだった。老女はもう一人とやってくるが、その人はいるのをとめてはならないということだった。

さて、老女はいつてしまった。老女がいくと、若者がいた。老女は、「息子よ、いい話がある。おまえさんの望みはかなった」という。若者は、「どうしたのか、母さん」といった。老女は、「その話だが、わたしは王さまのよめさんのところまでいった。指輪はおいておいた。女はおまえさんに直接あいたいといった」といった。若者は、「それで、わたしはどうしたらよい」といった。老女は、「で

きる。わたしがいるではないか。わたしはおまえさんといっしょにいく。あの女が王さまとねることになっている夜、あの女は王さまをおいはらう。おまえさんはいく。おまえさんはその女にであう。おまえさんのおもっているようにできる」といった。若者は、「よろしい」といった。二人はたちあがり、でかけていった。夜になった。王さまの家来たちは、家にかえていった。男は女の着物をきてやってきた。老女はよい着物をとると、若者にわたした。老女はいくとき、自分たちは王さまのよめさんの母親たちだというという。男は着物をきて、頭からベールをつけた。男は着物をすっかりきおわった。

さて、二人はやってきて、とおりすぎた。男は女の着物をきていた。男は女のようになった。老女はさきがあるき、どんどんあるいていく。老女はいつものあるきかたをしている。男は王さまの母親のところにいくという。二人はとおりすぎていく。

さて、門番をしている奴隷たちは二人をとめようとした。奴隷たちのうち一人が、「なんだって、この人たちのことはわかつている」といった。老女はすたすたとおりすぎていった。すなわち、老女は王さまのよめさんの客だというわけだ。老女はそこをとおりすぎて、女のところにいった。老女はまるで、品物をうるもののようにしていった。老女はいき、「きのう、わたしは王さまのよめさんと話をした。きょうも、あの人のためにもってきたものがある」とい

った。老女はそこを半截ヒョウタンを頭にのせて、ひよこひよことおりすぎていった。老女はたちあがり、いった。いくと、自分の杖をついている。老女はそこをとおりすぎて、ハーレムにいく。男もはいっていく。なかにいる人たちは二人をむかえる。二人はほんどんなかにはいっていき、とうとう女のところについた。女は、「なんと、おまえさんたちはいっしょにきたのね。わたしはこの人がきたとおもって、入り口のほうをみてみた。なるほど、おまえさんたちはいっしょにきたのね」といった。老女は、「そうだよ」といった。女は、「なるほど、母さん、きたの。なるほど、姉さん、きたの」といった。女は老女を部屋のかなかにいれた。女は男を部屋のなかにいれた。男はすわった。老女はいろいろな話をして、「娘よ、わたしは家にかえる。わたしはおまえさんとおまえさんの客をおいでおく」といった。女は、「どうも」といった。客は部屋のなかにすわっている。女と男はずっと話をしている。夜になった。夜になり、王さまがやってきて、女をよぶと、女は頭がいたむし、客もきているので、王さまのところにやってきて、王さまの呼びかけにこたえることができないといった。王さまがやってくる。王さまがやってくる。女はよこになっている。女は客をかくしておいた。王さまと女は挨拶をかわした。王さまはいってしまった。女は客をかくしてあるところから、そとにだした。

さて、女と客がやってくる。客は家にかえるといった。女はあ

る手だてをかんがえた。そのつぎの日、女はべつの人に着物をきせて、いかせることにした。女は客とねた。夜になると、女と男がすることはきまつている。二人は部屋にいっしょにはいつている。王さまはこなかった。

さて、夜になると、男はかくれた。夜があけて、朝になった。男は王さまの屋敷に十日のあいだいた。夜になると、そのつぎの日も、女はある手だてをかんがえた。老女はきていなかった。女は気づかれないようにした。つぎの日のこと、女はある手だてをかんがえた。だれかがきたので、その人がかえるとき、その人に男がきていた着物をきせた。女は自分の客がかえっていくので、別れをいうようにといった。客はいつてしまった。男は、女の部屋のなかにいる。女はこの男のいいことがわかった。男は夜、あそんだ。女は客の女はでていったといっておいた。女は男を自分の部屋のなかにおいておく。女は、「この世では、男はみんなこんなものなんだね。なるほど、あの人はわかいのになにもせず、無駄をしているのね。男というものは、そういうものなのか」といった。男は王さまの屋敷にいる。王さまは女とただの遊びをしているだけだった。女は、「なるほど、こんな男がいるのね」という。夜になると、女は男といっしょだった。女は病氣だといった。王さまがやってきて、女に挨拶をする。夜になると、女は部屋のなかにある土の仕切のむこうがわで、腰をおろし、食べ物をつくる。それをもつてくると、

男にたべさせる。男はかくれている。男はいる。王さまがやってきて、女をみて、「体はどうだ」という。女は王さまに肉のほかにないという。女は肉がほしいという。王さまはいき、肉をかって、もつてくる。女は肉を料理すると、部屋のなかにいる男にやる。若者は満腹し、ふとってきた。男は女に、なにもほしくない、ただ、おまえさんといっしょにでていく手だてだけがほしいといった。女は、「こうなれば、おまえさんがこの町の王さまになりたいといったら、それを手にいれることができる。おまえさんはどこにもいく必要はない。ここにおればよい。おまえさんは王さまになればよい」といった。男は、「わたしはおまえさんをつれていく。いこう」といった。女は、「いいや、それはできない。おまえさんがこの町の王さまになったら、いけないの」といった。男は、「わたしは王さまになる」といった。女は、「よろしい」といった。男は、「わたしに王さまになれというのなら、王さまになるだけだ」といった。女は、「でも、わたしにはあの王さまとわかれる手だてがある」という。女はたちあがると、男にその方法をおしえた。女は男に、どのようにしたらよいのかをみんなおしえた。女はよくきれる小刀を男にわたした。女は男に刀をわたし、王さまがころせるようにした。女はこの男といっしょにいたかった。男と女はいた。夜になった。女は王さまのもとにもどるといった。男はそのままそこにいた。夜になると、女は準備をし、体がよくなったといった。王さ

まはたちあがり、もどってきた。女は男に、王さまになにをしたらよいのかすべていっておいた。王さまがもどってきた。王さまはやつてくると、王さまと女は話をした。女は王さまの体をなでた。女は王さまにいろいろなことをした。王さまはやつてくると、準備をし、ねた。

さて、王さまは女といっしょにねようとした。王さまは女とねようとして、女をさわると、そこにいたのは自分とおなじような男だった。

さて、男は、「おまえさんはなにをするつもりだったのか」といった。王さまは、「はあ」というと、心臓がさけてしまった。こうして、王さまは死んでしまった。王さまのそばには、自分とおなじような男がいたからだ。

さて、女は男に、「どうするつもり」といった。男は、「こうなっただけだ」といった。

さて、王さまは死んでしまった。死んでしまった。夜があけて、朝になった。人びとは、「王さまが死んでしまった。王さまが死んでしまった」という。若者がおきると、女はよい服をとると、若者にさせた。若者は王さまの服をきると、王さまのようになった。若者はそとにでていき、家来たちのいるところで、長椅子にすわった。若者は家来たちのいるところにすわった。家来たちは若者のところにもつてくるものを準備するためだろうが、いそがしくしてい

る。若者はすわっている。

さて、若者は王さまになった。門番たち、女たちは、その若者が王さまにならないなら、屋敷からでていくといった。若者が王さまにならないと、みんな屋敷からでていくといった。女は王さまをなきものにした。王さまの兄弟は王さまにならないといった。

さて、男は王さまになり、まえの王さまのよめさんと結婚した。

さて、話はおわった。

わかるかな。若者は父親に馬鹿にされ、おこり、マイガリ・マルマルゴのところに行かなければといったね。こうして、若者はマイガリ・マルマルゴのところに行つて、マイガリ・マルマルゴをころして、その屋敷を自分のものにした。若者はそこにいる。若者はその町を自分のものにした。若者は自分の父親と母親のところを使い、自分が王さまになり、まえの王さまをころしてしまつたといつたとさ。

さて、このお話はおしまい。お話はおわった。

(一九八三年一月二二日、語り手 ハッジャ・ラブラトゥ・イス
フ、ガウンデレにて)

250 ファーディマトウと兄さん

さて、ある女の子と男の子の二人がいた。二人は父親と母親といふ。二人はおなじところにすんでいる。二人はおなじ場所にすんでいる。

さて、二人は両親とすんでいる。

さて、二人の両親が死んでしまった。

さて、二人はたちあがり、野原にいった。二人はどんどん野原をあるいていった。二人は野原のまんなかについた。二人はそこにおちついている。父親は兄さんにナスビをやっていた。

さて、兄さんはナスビをもった。このナスビがあかくなると、家になにかわるいことがおこる。いつもとおなじようならば、家にはなにもおこらない。

さて、ファーディマトウの兄さんは山の岩をわり、それで小屋の戸をつくった。戸はすべて、岩でできている。戸は内側からしめる。兄さんは妹をなかにいれたまましめた。二人はそこにいた。兄さんは妹といっしょにすんでいた。朝、兄さんはおきると、野原にでかけていく。兄さんはいくと、食べ物さがす。兄さんはあっちこっちで食べ物をさがす。さがすと、じぶんお妹のためにもってくる。妹はそれを料理する。いつも、小屋の入り口につくと、妹の名前をよぶ。妹の名前はファーディマトウという。

さて、兄さんは妹にいう。

「ファーディマトウよ、ファーディマトウよ、屋敷の主よ。」

ぼくのために戸をあけておくれ」

妹はいう。

「ようこそ、兄さん、戸よ、あくように」

娘がこのようにいうと、戸があく。戸があくと、兄さんは小屋にはいる。あくる朝、またしても、兄さんは野原にでかけていく。兄さんはいつてしまった。兄さんは、野原にいくと、もどってくる。もどってくる。

さて、兄さんはやってくる。兄さんは戸口にくる。戸口にくると、妹にいう。

「ファーディマトウよ、ファーディマトウよ、屋敷の主よ。」

ぼくのために戸をあけておくれ」

妹はいう。

「ようこそ、兄さん、戸よ、あくように」

戸があく。兄さんは小屋にはいる。

さて、クモがやってきて、戸口にたちどまった。クモは、兄さんがやってきて、歌をうたうのをきいている。クモは兄さんの歌をきく。いつも、兄さんがやってきて、歌をうたうと、クモはきいている。

さて、ある日、クモはたちあがり、ひとりでやってきた。クモは

戸口のまえにやってきた。クモはやってくると、たちどまった。クモはうたう。

「ファーディマトゥよ、ファーディマトゥよ、屋敷の主よ。

ぼくのために戸をあけておくれ」

娘は、「なんだって、わたしはおまえさんをしらない」といった。「おまえさんなんか知らない」といったのだ。クモはどこかにいったしまった。クモは鍛冶屋のところに行った。鍛冶屋はだれの声でもなおすことのできる力のある人だった。クモは鍛冶屋のところに行く。クモは鍛冶屋に、「わたしの声をかえておくれ」といった。鍛冶屋はクモの声をほそい声にかえた。クモがやってきた。クモは女の声でうたう。娘は、「わたしはおまえさんをしらない」といった。クモは鍛冶屋のところにもどっていった。

さて、鍛冶屋はクモの声を兄さんの声のようにした。クモがうたう。

「ファーディマトゥよ、ファーディマトゥよ、屋敷の主よ。

ぼくのために戸をあけておくれ」

娘はいう。

「ようこそ、兄さん、戸よ、あくように」

さて、戸がひらくと、そこに娘がいた。クモは娘をつかんだ。娘はどうしようもないほどきれいだった。この町のなかにこれほどきれいな娘はいなかった。クモはその娘をつれてはしっていった。ク

モはどんどんどんはしっていった。

さて、そのとき、ナスビはあつくなつた。ナスビはあくなり、兄さんに火傷をさせた。兄さんはナスビを手元にひきよせ、ひらいた。兄さんがナスビをひらいてみると、あかくなっていた。家になにかおこつたのだ。兄さんははしった。兄さんがやってくると、妹がいなかった。兄さんはどんどん妹のあとをつけて、野原にいった。兄さんは妹を一生懸命にさがしたけれども、みつからなかった。

ほんとうのこと、クモと娘は川のほうにいた。クモと娘は川のそばにいった。朝五時に、夜があける。王さまの女奴隸たちが川へ水をくみにくる。やってくるとき、女奴隸は娘をみた。

さて、クモはにげていき、娘を川のそばにのこしておいた。クモは娘を川のそばにのこすと、にげていき、女奴隸たちにはつかまらなかった。クモはにげていってしまうと、女奴隸ははしって、王さまのところいき、王さまに、「王さま、わたしたちは、王さまにすばらしい娘を手にいれてあげました。その娘は川のそばにすわっています。でも、わたしはその娘がだれかしりません」といった。王さまは、「その娘をつれてきておくれ」といった。王さまの家の女が娘をつれてきた。女たちはその娘をおきあがらせる。娘は話をしようとしな。娘はふせたままだ。女たちは娘をゴザのうえにすわらせた。娘はそのうえにふせた。娘はまったくうえをみようとし

ない。王さまはどうしようもなかった。娘はふせたままだ。娘はな
いている。王さまは娘を部屋にいらした。王さまがはなしかけるが、
娘は話をしない。王さまはできることをすべてする。女たちは娘の
ヴェールをとらなかつた。女たちは娘の顔をみながつた。

さて、娘がねていると、娘の心臓から根っこがはえて、ゴザのう
えまででてきた。そこに根っこがはえてきた。

さて、娘の兄さんは家にかえつてきた。家にかえつてきたのだつ
た。

さて、兄さんはかえつてくると、ハウサ族がつくるモロコシの玉
(これと酸乳をまぜてのむ)をつくつた。モロコシの玉をつくると、
それを頭にのせて、あつちこつちをうろついている。兄さんは屋敷
にはいるときには、いつも、「ごめんください」という。屋敷には
いるときには、いつも、おなじことをいう。

さて、兄さんはいう。

「ファーディマトウよ、ファーディマトウよ、屋敷の主よ。

ぼくのために戸をあけておくれ。

ようこそ、兄さん、戸よ、あくように」

兄さんは自分のはいるすべての屋敷で、こういう。こうして、王さ
まの屋敷にいる王さまの子どもたちは、この若者のあとをおつて、
若者といっしょにあつちこつちをうろつく。子どもたちはその歌を
おぼえていく。朝から晩まで、子どもたちは家にかえつてこなかっ

た。子どもたちは若者の歌をおぼえていく。

さて、王さまはやつてきて、子どもたちに、「おまたちは、いつ
もどこにいくのか。いうのだ。いわないと、おまえたをたたく」
という。子どもたちは、「いいよ。わたしはある人についていった。
その人はモロコシの玉をもっている。その人は歌をうたう」といっ
た。王さまは、「その歌はどういうふうにしてうたうのか」といっ
た。子どもがいった。

「ファーディマトウよ・・・」

子どもがその歌をうたいはじめると、娘はおきあがつた。娘は、
「その人はどこにいるのか」といった。王さまは、「はしつて、いっ
て、その人をつかまえない」といった。王さまの家のものがどん
どんはしつていった。若者はモロコシの玉をもつて、あつちこつち
をあるいている。王さまは家のものたちを使いだし、その若者を
つかまえるようにといった。王さまの家のものがあるっていく。い
くと、若者の歌をきいた。王さまの家のものたちはその若者をつか
まえた。王さまの家のものたちは若者をつかまえると、奴隷の頭
にのせるようにといった。奴隷は若者を頭にのせた。

さて、若者がモロコシの玉をいれていた半截ヒョウタンがついぶ
れた。モロコシの玉がいっぱいはいつていたが、モロコシの玉は一
つも地面におちなかつた。奴隷たちは四人で、若者を頭にのせては
こんでいった。奴隷たちは若者を王さまの屋敷までつれていった。

奴隸たちが若者を王さまの屋敷までつれていくと、若者は王さまたちとすわっている。王さまは、「どうしたのだ」とたずねた。若者は自分の妹のことについて、「王さまがわたしの妹をぬすんだのです」といった。王さまは、「とんでもない。おまえさんの妹は川のそばにいたのだ」といった。王さまは女奴隸に、「この人の妹はどうしていたのか」という。女奴隸は、「クモがいつて、この娘をつれて、やつてくると、川のそばにほっておいたのです」という。若者は、「よろしい。そういうことなら、問題はありません」といった。王さまは、「よろしい。おまえさんは、わしの娘と結婚するがよい。わしはおまえさんの妹と結婚する。おまえさんは、わしの町の半分をとるのだ。わしは町の半分をとる」おとといった。若者は、「よろしい」といった。王さまは娘の顔をみたことがなかったが、その娘と結婚するといった。

さて、娘をつれてきた奴隸も、女奴隸も、「その娘はみにくいです」といった。奴隸たちは、「その娘はけつしてきれいではありません。娘はみにくいです」などといった。奴隸たちは、「娘がみにくくなかったら、わたしたちをころしてください」といった。女奴隸も、「娘がみにくくなかったら、わたしを土ナベにしてください」といった。もう一人が、「娘がみにくくなかったら、なんでもわたしをすきなものにしてください」といった。

さて、王さまが、「それでは、わしはその娘をみる」といった。

王さまは、「娘よ、でなさい」といった。王さまは、娘のためと、自分のために二つの椅子をおいた。人びとはみんなすわっている。「娘はきれいだ」といった人もたっている。「娘はきれいでない」といった人もたっている。人びとは、「よろしい。その娘の幼友だちがでるがよい」といった。娘の幼友だちがやってきた。娘の幼友だちはどうしようもないほどうつくしかった。

さて、娘の幼友だちがやってきた。娘の幼友だちは、「あなたたちが、あの人にてきてもらいたいのなら、この町でみられなかった絨毯をもつてきて、地面にしいておくれ。あの人地面をふまないうように」といった。王さまは、「わしはなんでももつてくる」というと、絨毯をもつてきた。べつの絨毯をまるめたものが王さまのうしろにたっている。絨毯をまるめたものが三つたっている。王さまは、「でるようにな」といった。人びとは、「なんですって。その絨毯はみつともないです。よい絨毯をもつてきてください」といった。よい絨毯がはこばれてきた。

さて、王さまは、「でるようにな」といった。王さまはいちばんよい寛衣をきた。王さまがいちばんよい寛衣をきて、娘が戸口のそばに足をやるのを見ると、人びとは娘をそこでとまるようにといった。人びとは太鼓たたきたちをたたせた。娘が戸口に足をやるのと、王さまは、「カープ」といった。王さまの寛衣はすでに涎でいっぱいだった。王さまの家のものたちは王さまから寛衣をぬがせ

て、あちらのほうにおいておいた。王さまが、「カーツプ、イルリン・カバ、娘をつかまえないさい。娘がころばないように。ころんだら、しょうちしない」といった。王さまの家のものたちは、娘が椅子にすわるまで、王さまから寛衣を十着ぬがせた。娘は椅子にすわった。

さて、王さまは自分をころしてもよいといっていた女を家につれてかえつてきて、ころした。こうしてくれといっていたものには、みんなそうさせた。

さて、若者の妹は、王さまと結婚した。若者は王さまの娘と結婚した。王さまは町をちょうど半分にわけた。若者は自分のものになった町の王さまになった。王さまはもう一つの町の王さまになったとさ。

おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は、ハウサ族の女性からきいたという。アーマドゥ・ルフアーイは、一九七七年から一九八〇年のあいだモコロにいた。アーマドゥはガウンデレで一九六三年にうまれた)

251 石の王さまと草の王さま

すなわち、ある男の子がいた。男の子は父親の屋敷にいた。父親は王さまだった。草の王さまだった。

さて、男の子には妹がいて、タサツラという。男の子は妹といっしよだった。二人はいっしよにすんでいる。

さて、男の子はたちあがった。男の子のウマはだれかが草をかき、草のおおきさがきつちりおなじでないと、その草をたべない。

さて、石の王さまのウマも、そのような草をたべるのだった。石の王さまのウマはそのような草をたべる。石の王さまのウマはあらった水(水を水であらうという。むろんありえない話。)をもらったのむ。

さて、男の子は父親の屋敷にすんでいる。ある日、男の子はたちあがり、野原にいった。男の子は自分のウマにたべさす草をとった。男の子はかえってくる。

さて、男の子はつかれたので、草を妹のタサツラにわたした。

さて、男の子はたちあがり、家にかえつていった。ある人はタサツラにものをこばせなかった。

さて、ある人はタサツラが草を頭にのせてはこんでいるのを見て、「なんだって、どうして、おまえさんは草を頭にのせてはこんでいるのか。おまえさんのウマは石の王さまのウマよりいいのか。

石の王さまのウマよりよいのか。(ドゥツェとはハウサ語で、「石のことをいう」といった。タサツラは、「妹にはこぼせているだけ」といった。人びとは、「それでは、おまえさんのウマは石の王さまのウマほどよくはないではないか。おまえさんのウマにのつて、石の王さまのウマをみにいきなさい」といった。このように、父親は息子を馬鹿にした。

さて、男の子はたちあがった。

さて、たちあがると、自分のウマにのつて、石の王さまのウマをころしてしまふ、石の王さまのウマとであつて、たたかうといつた。

さて、この男の子は草の王さまの子もだった。

さて、男の子はたちあがった。男の子はすすんでいく。男の子は野原のなかをすすんでいくときいう。

「ニーナ・ヤンコ・チャールワ、ダルマナ。

ニーナ・バイワ・タサツラ、ダルマナ。

スーバー・ワダ・インナ、ダルマナ。

イー・ストゥー・スカ・ターシー、ダルマナ。

スンチエーコー・ドーキー・ナー・ピーナー、サルキン・ド

ーゴー、ダルマナ。

イー・チャンケー・サイ。ンガンチー、ダルマナ。

イー・ジャーピーニー・カスニ・ドゥングル」

男の子はたちあがつて、すすんでいく。男の子はいこうとしていくところについた。木が男の子にたずねた。男の子はいった。

「ニーナ・ヤンコ・チャールワ、ダルマナ。

ニーナ・バイワ・タサツラ、ダルマナ。

スーバー・ワダ・インナ、ダルマナ。

イー・ストゥー・スカ・ターシー、ダルマナ。

スンチエーコー・ドーキー・ナー・ピーナー、サルキン・ド

ーゴー、ダルマナ。

イー・チャンケー・サイ。ンガンチー、ダルマナ。

イー・ジャーピーニー・カスニ・ドゥングル」

男の子はいった。男の子は石の王さまのところについた。石の王さまはすわっている。男の子はついた。石の王さまが、「おまえさん、ここへなをするためにやつてきたのか」とたずねた。男の子は、石の王さまのウマをみにきたといった。石の王さまは男の子に、「よろしい」といった。きて、ウマをみなさいといった。男の子はやつてきた。

さて、石の王さまは石でできたナイフをもっていた。王さまのナイフは石でできていた。このナイフで人をきると、火がでてくるのだった。人は火花のようにとびちるのだった。男の子は木の術だけをもっていた。

さて、すこしたつと、男の子がやつてきた。石の王さまは自分の

ウマを杭からはなした。男の子も自分のウマをつれてきて、戦いにいった。男の子は自分のウマにのって、石の王さまとたたかう。

さて、王さまは男の子とたたかっているとき、このようにして、石のナイフをよんだ。ナイフがやってきた。王さまはナイフを手にした。石のナイフだった。ナイフがやってきたので、それを手にした。

さて、男の子はにげていき、木にのぼった。この木は男の子のこゝとをしらなかつた。この木は男の子の仲間の木ではなかつた。男の子はいった。「よろしい。」

ニーナ・ヤンコ・チャールワ、ダルマナ。

ニーナ・バイワ・タサツラ、ダルマナ。

スーバー・ワダ・インナ、ダルマナ。

イー・ストゥー・スカ・ターシー、ダルマナ。

スンチエーコー・ドーキー・ナー・ピーナー、サルキン・ド

ーゴー、ダルマナ。

イー・チャンケー・サイ。ンガンチー、ダルマナ。

イー・ジャービーニー・カスニ・ドゥングル」

男の子はこのようにいった。

さて、木がたちあがつた。

さて、いろいろな木がそこにやってきて、男の子をたすける。石の王さまは岩をおす。岩がやってくると、木がそれをとめる。石の

王さまが岩をおす。岩がやってくると、木が邪魔をする。

さて、石の王さまが自分の投げ槍をよぶと、木が邪魔をする。

さて、石の王さまが自分の投げ槍をよぶ。王さまの投げ槍がたちあがりやってくる。王さまの投げ槍がたちあがりやってくると、わかるとおもうが、投げ槍も木なので、（木が邪魔をする。）王さまは男の子にむかつて矢をいる。矢も、わかるとおもうが、草の仲間だ。矢はやってくると、男の子のまえで地面にささる。男の子に投げ槍をなげると、投げ槍はやってきて、とまる。

さて、男の子が投げ槍をたたくと、投げ槍は王さまのところにいき、石の王さまをころしてしまった。男の子のウマは石の王さまのウマとであつて、たたかい、石の王さまのウマをころしてしまつた。

さて、男の子は石の王さまの町をおさめた。男の子はそこにすんで、その王さまになつたとさ。

この人たちの話はおしまい。

（一九八三年一月二六日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話はハウサ族の娘から一週間ほどまえにきいたという）

252 つよい人たちと王さま

さて、お話、お話。

ある人たちがいた。この人たちはたいへんつよかった。この人たちは王さまの奴隷たちだった。この人たちはサトウキビを手でしほる。サトウキビを手でしほり、ジュースにしてのむ。力があつた。手で油をしほりだす。綿の種を手でしほり、油をだす。

さて、二つの仕事をする人のことがわかつたな。三つ目の仕事は若者がする。その仕事は野原をうろつくことだった。この若者にはできないことがない。

さて、王さまは使いのものをおくり、この若者をつかまえて、屋敷につれていった。人びとはこの若者を簾をつくる草のなかにいれて、そのうえを布でおおつた。人びとは若者をころそうとした。というの、若者に力があつたからだ。若者にはちいさなヘビがいた。ヘビは話をする。ヘビが人に息をふきかけると、この人は骨だけになる。ヘビがやってきて、人に息をふきかけたので、息をふきかけられた人は骨だけになった。

さて、王さまは若者に薬をもつてきた。

さて、王さまは若者を野原につれていき、ドウムヤシの木のしにたせた。ドウムヤシの木は身をひくくした。若者がわらうと、雨がふる。若者がおこると、太陽は人をひからびさせた。若者

が木をたたくと、木は身をひくくした。人びとは若者を木にのぼらせた。

さて、若者はおこつた。王さまは、いつてしまった。

さて、若者がわらつた。

さて、王さまは雨にうたれた。ヘビがやってきて、木をたおした。木が身をひくくしたので、若者は木からおりた。若者は木からおりて、王さまの屋敷にかえつた。若者は、「王さまの服をおくれ。それをきる。それをきていく。王さまの服をとる。王さまの食べ物をもつていく」といった。若者は王さまの食べ物を取り、たべた。王さまの服をとり、きた。若者は王さまの椅子にすわっている。王さまがかえつてきた。王さまは雨にうたれ、道にまよつた。王さまがかえつてきた。

さて、王さまがかえつてくると、若者が王さまの椅子にすわつていた。

そのとき、王さまは死んでしまった。王さまのよめさんも死んでしまった。王さまの子どもたちも死んでしまった。若者は王さまになり、町をおさめた。

この話も、みじかい話だ。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルファイー、ガウンデレにて。この話はイスラム教徒になったバヤ族の子どもから、ガウンデレで聞いたという)

253 ルドヨとヘビ (1)

さて、すなわち、野原にある動物がいて、どんどんおおきくなっていった。その動物とはドロ、すなわち、サルのことだった。フルデ語でドロという。サルは野原でおそろしくおおきくなった。サルはどんどんおおきくなっていった。サルはおそろしくおおきくなっていった。

すなわち、このサルの名前は、ルドヨという。

よろしい、サルがやってきた。いくと、ヘビの子どもがいた。ヘビはおそろしいことをしていた。だれも、ヘビをやつつけることができなかった。サルは野原でヘビをみつけた。ヘビの子どもをみつけた。ヘビは子どもをうんで、どこかにいつていた。サルはやつてくると、ヘビをつかまえて、きりさいた。サルはちいさなヘビをつかまえて、一匹をのこして、すべてころしてしまった。サルは、「おまえさんの母親がかえってきたら、こういうのだ。」

『わたしはルドヨ。』

わたしは、ンガラバのムチをもつ、

上等のズボンをはいている、

黄金をつけた縄をもっているルドヨ」

サルはいった。

「わたしはルドヨ。」

わたしは、ンガラバのムチをもつ、

上等のズボンをはいている、

黄金をつけた縄をもっているルドヨ。

そうだ、わかつたな。さて、きいたな」

サルはたちあがつた。

さて、サルは野原にいく。ヘビの母親がかえってきた。サルは自分のウマにまたがつた。そのウマは雄ウマで、このウマよりはやくはしれるウマはいなかった。サルはべつの野原にいった。

さて、ヘビはやってきて、たずねる。ヘビはある村にやつてきて、いった。

「だれがルドヨか。」

だれが、ンガラバのムチをもつ、

上等のズボンをはいている、

黄金をつけた縄をもっているルドヨか」

村人はヘビに、「さきおととい、ルドヨはとおりすぎていった」といった。ヘビは道があるいて、べつの村にいった。ヘビは言った。

「だれがルドヨか。」

だれが、ンガラバのムチをもつ、

上等のズボンをはいている、

黄金をつけた縄をもっているルドヨか」

村人は、「三日まえに、ルドヨはここをとおりすぎていった」とい

った。ヘビはべつの村についた。ヘビはいった。

「だれがルドヨか。」

だれが、ンガラバのムチをもつ、

上等のスポンをはいている、

黄金をつけた縄をもっているルドヨか」

村人は、「おととい、ルドヨはここをとおりすぎていった。もうすこしで、ルドヨのいるところがわかる」といった。ヘビはべつの村についた。村人はヘビに、「きのう、ここをとおりすぎた」といった。(ヘビはすすんでいき、たずねる。)村人は、「夜明けどき、この村をとおりすぎていった」という。ヘビはルドヨのウマがさきほどとおりすぎていったことがわかった。ヘビは野原についた。ルドヨのいるところには、岩がある。ルドヨはほとんど岩をつぶし、そこよこになる。ルドヨのウマはしばってある。ルドヨのウマはなんでもきく。ウマがいなくなると、なにかがやってくるのがわかる。さて、ルドヨはヘビがいうのをきいた。

「だれがルドヨか。」

だれが、ンガラバのムチをもつ、

上等のスポンをはいている、

黄金をつけた縄をもっているルドヨか」

さて、ルドヨはよこになり、耳をかたむけて、きいた。

「だれがルドヨか。」

だれが、ンガラバのムチをもつ、

上等のスポンをはいている、

黄金をつけた縄をもっているルドヨか」

ヘビは村全体をのみこむことができる。いつも、ヘビは村全体をのみこむ。ヘビは毎年一つの村を村人といっしよにのみこむ。ヘビの腹のなかで、市場がひらかれている。わかつたな。ヘビはおきあがり、すわった。ルドヨは頭をあげた。ルドヨは頭をもちあげた。さて、ルドヨはいった。

「わたしはルドヨ。」

わたしは、ンガラバのムチをもつ、

上等のスポンをはいている、

黄金をつけた縄をもっているルドヨ」

さて、ルドヨは、「よし」といった。ルドヨは勇気をみせるために、地面におりた。ルドヨはおりた。ルドヨは自分の槍をぬいた。槍は地面によこしておかない。すなわち、ルドヨの槍はすべてうえにあつた。槍を木にさし、木からひきぬくと、根から幹まですっかりぬけて、たおれ、かわいてしまう。ルドヨが手をあげると、槍がルドヨの手にとんでくる。ルドヨはそれをとる。ルドヨはヘビを槍でつきさしてやろうとしてやってきた。ルドヨは、「戦いはながびかない。槍をおいていき、戦いがながびいたほうがよい」といった。ルドヨが槍を地面にころがしておこうとすると、槍ははねか

えって、木のほうにとんでいき、木にささった。たえ木がとおく

にあつてもおなじだった。そのさきに、ルドヨの子どもが小屋にいたが、でてきた。でてくると、槍は木からぬけて、木はかわいていた。すなわち、ルドヨが人を一人たたくと、野原の木はすべてかわく。ルドヨがやつてきた。ルドヨはヘビとたたかいた。ルドヨとヘビはたたかった。ルドヨとヘビはたたかった。ルドヨはヘビをたたいた。ヘビはあちらのほうにいった。草がかわいた。ルドヨが、「よし」といった。ヘビがルドヨに、「さて、昼過ぎの礼拝のときがやつてきた。礼拝をしよう」といった。ルドヨは、「わしらの村ではこんなとき礼拝しない」といった。ヘビが、「おまえはおまえの礼拝をしたらよい。わしはわしの礼拝をする」という。ヘビが礼拝をしようとする。ヘビがこのようにすると、ルドヨは爪で、ヘビの首をきってしまった。首がとれてしまった。首はあちらのほうにころがつた。ヘビの尾っぽはルドヨとたたかいはじめた。ルドヨとヘビの尾っぽはずっとたたかっている。夕方の礼拝のときがやつてきた。ルドヨとヘビの尾っぽは、「夕方の礼拝をしよう」といった。ヘビは、「よろしい。夕方には、いつて、わしの礼拝をする」といった。ヘビが体をもちあげ、礼拝をしようとしたとき、ルドヨはヘビの尾っぽをきった。ルドヨはヘビの体をばらばらにしてしまった。ルドヨはヘビの体を火でやいた。村の人たちはみんなヘビの腹からでてた。村はもとどおりおおきくなった。ルドヨは王さまに

なつたとき。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーマドウ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は語り手の曾祖父(母)からきいたという。)

254 ルドヨとヘビ (2)

ヘビがいた。ヘビは村をみんなのみこんでしまった。

さて、一匹のサルがいた。このサルの名前は、ルドヨという。ある日、ルドヨがやつてくると、ヘビの子どもが食べ物をさがしにでかけていつていた。ルドヨはやつてくると、ヘビの子どもを一匹だけのこして、残りをみんなころしてしまった。ルドヨはいった。「おまえさんの母親がかえってきたら、こういうのだ。」

『わたしはルドヨ』

わたしは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもつ、

上等のズボンをはいている。

わたしがやつてきて、ころした。黄金をつけた縄をもっているルドヨ』

母親にそっくりなさい」

さて、母親がやつてきて、子どもにどうしたのかとたずねた。子どもはルドヨにいわれたとおりにいった。

さて、母親は子どもについていった。

さて、母親は道があるいていった。母親がいう。

「だれがルドヨか。」

ルドヨは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもつ、

上等のスポンをはいている。

黄金をつけた縄をもっているルドヨ」

村人は、「ルドヨはとおりすぎていった。ほら、あそこだ。とおく
ない」といった。ヘビがいう。

「だれがルドヨか。」

ルドヨは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもつ、

上等のスポンをはいている。

黄金をつけた縄をもっているルドヨ」

ヘビはルドヨのあとをつけ、どんどんあるいていった。とうとう、
ヘビはルドヨのところについた。ヘビがいう。

「だれがルドヨか。」

ルドヨは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもつ、

上等のスポンをはいている。

黄金をつけた縄をもっているルドヨ」

さて、ルドヨがそれにこたえた。

「わたしはルドヨ

わたしは、雄ウシの頭の皮でできたムチをもつ、

上等のスポンをはいている。

黄金をつけた縄をもっているルドヨ」

ルドヨとヘビはどんだたかう。ルドヨとヘビはずっとたたかつ
た。

さて、昼過ぎの礼拝のときがやってきた。ルドヨが、「おまえは
うえをみるのだ。礼拝をしよう」といった。ヘビがうえをみて、礼
拝をしようとすると、ルドヨはヘビの首をきってしまった。

さて、ヘビの尾つぽがおきあがり、ルドヨとたたかう。夕方の礼
拝のときがやってきた。ルドヨは、「お日さんをみて、夕方の礼
拝をしよう」といった。尾つぽがやってきて、うえをみると、ルドヨ
はヘビの尾つぽをきった。ルドヨはいくと、ヘビの肉をやいた。

さて、村の人たちはみんなヘビの腹からどんでてきた。村人
はいくと、いろいろなものを手にいれたとさ。

お話は、おしまい。

(一九七六年八月一六日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガ
ウンデレにて)

255 みにくい女と野原の怪物

すなわち、この話の主人公も、娘だった。娘は自分の家族といっ
しよにすんでいる。家族はみんなこの娘がきらいだった。母親だっ

て、きらいだった。娘をうんでおいて、きらうのだった。

さて、娘はほとんど野原をあるいていく。

さて、娘がいくと、おそろしい怪物がいた。娘はどうしたらよいかわからなかった。

さて、怪物が、「おまえさんはどこにいくのか」とたずねた。娘は、「わたしは家でどうしてもうけいれない。わたしはどこかにいって、姿をけしてしまふ。母親にも、わたしがどこにいったか、わからないようになる」といった。怪物は、「わかった」といった。娘は、「どうしたらよいだろう」という。娘は自分が家でみにくいといわれているからだといった。怪物は、「それでは、きなさい」といった。野原の怪物は娘に何度も息をふきかけた。娘はきれいになった。怪物が息をふきかけると、銀がでてきた。怪物が息をふきかけると、黄金がでてきた。娘はすっかりきれいになった。怪物が、「それでは、わたしはおまえさんに富をやる。おまえさんが家について、お母さんの家族のところで歌をうたうと、おまえさんのうしろから家畜がやってくるだろう。おまえさんの屋敷のまえまで、ウマにのって、かけるがよい」といった。

さて、娘はあるいていく。

さて、娘は屋敷のそばについた。娘はうたう。

「わたしたちの母さんはここにいます。

わたしたちの父さんはここにいます。

わたしたちの母さんはここにいます。

わたしたちの父さんはここにいます」

娘はあるいていく。娘ははしっている。娘はウマにのってどんどんはしる。娘はうたう。

「わたしたちの母さんはここにいます。

わたしたちの父さんはここにいます。

わたしたちの母さんはここにいます。

わたしたちの父さんはここにいます」

さて、だれかがいうのがきこえる。

「娘よ、どこにいます。

娘よ、どこにいます」

娘がいう。

「わたしはここにいます。母さんたちはいるね」

娘はウマにのってどんどんはしる。娘はうたう。

「わたしたちの母さんはここにいます。

わたしたちの父さんはここにいます」

だれかがいう。

「娘よ、どこにいます。

娘よ、どこにいます」

娘はうたう。

「わたしたちの母さんはここにいます。

わたしたちの父さんはここにいます」

さて、すべての家畜がでてきて、娘についていく。娘はウマのつて、屋敷についた。娘は屋敷についた。

さて、そこには家族がいた。娘の母親のライバル妻まで、家にかえってくるといった。家にかえってきて、娘といっしょにいて、娘のために仕事をするといった。母親のライバル妻は琺瑯引きの食器をあらってあげるといった。父親は娘の着物をあらう、娘のウマに水浴びをさせ、娘を結婚させるといった。

さて、娘はそれのことわった。娘は大人をつかわないといった。大人たちはみんな娘を馬鹿にする。

さて、野原にある若者がいた。若者はライオンで、おきあがり、村にやってきた。娘はライオンをみた。でも、ライオンはきれいだつた。ライオンは、「よろしい。わたしはおまえさんの目にきれにみえるだろう。わたしはすっかり人の姿になる。わたしはおまえさんと結婚する」といった。娘は、「それでは、そうしましょう」といった。ライオンは娘と結婚すると、娘をつれていった。ライオンは娘をおきな村につれていった。娘はその村にすんでいる。娘はライオンとその村にすんでいる。ライオンは娘をそこにおいておいた。娘とライオンはすつといっしょにすんだ。

さて、ある日、ライオンは娘をころすといった。ライオンが娘をころすという、野原で、怪物はそれをきいた。怪物は娘が小声で

いうことをすべてきいていた。娘は小声で話をした。娘は、「これから、ライオンにころされるとおもう」といった。

さて、怪物は娘が小声でいうのをきいている。怪物はいくといった。ライオンはおきあがり、娘をころそうとする。怪物がやってきた。怪物はやってくると、ライオンをころしてしまった。

さて、娘はたちあがり、家にかえろうとする。娘はライオンの財産をとった。娘は怪物のところで財産を手に入れた。怪物は娘に財産をふやしてやった。娘はたちあがり、家にかえっていく。娘はうたう。

「わたしたちの母さんはここにいます」

わたしたちの父さんはここにいます」

「娘よ、

おまえの母さんはいます」

おまえの父さんはいます」

娘は屋敷のなかについた。娘はおちついた。娘は金持ちになった。娘は王さまになった。娘は自分の財産をもつて、その村をおさめた。というのは、娘が財産をもつようになったのも、自分の運のおかげだつた。

お話はおしまい。

(一九八三年一月二六日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガ

ウンデレにて。この話は、ハウサ族の女からきいたという。）

256 王さまと三人のよめさんたち

慈悲ふかき、慈悲に限りのあるアッラーのみ名によつて。

お話、お話。

あるところに一人の男がいた。男には、四人のよめさんたちがいた。この男はある町の王さまだった。王さまは旅にでかけるところだった。王さまは女たちみんなにウマを一匹ずつわけあたえた。王さまは自分のやったウマが、たとえ年老いていても、自分ののつているウマとおなじような子をうまなければならぬといった。

さて、王さまは女たちに自分とおなじような子どもをうむようにといい、旅にでかけていった。王さまは十ヶ月のあいだ旅をつづけるという。

さて、どの女も、お腹がおおきくなった。どの女もお腹がおおきくなり、四人とも、自分の子どもをうんだ。

さて、一人の女はたちあがると、なんとかして、王さまのあとをおつて、王さまのでかけていった町にいった。女はそこにいくと、男の姿をし、自分はある町の王さまであるといった。夜になるといつも、女は王さまといっしょに夜のときをすごすのだった。

さて、ある日、女は王さまに冗談をいい、王さまに、「よろしか

つたら、いっしょにすみましょう。わたしのウマをとり、おまえさんのウマとかけあわせましょう」といった。王さまは女に、「よろしい」といった。

さて、人びとは女のウマをつかまえ、つれてきて、王さまのウマとかけあわせた。

よろしい、(女はもとの姿にもどり) 女と王さまはながいあいだいっしょだった。ウマはお腹がおおきくなった。女もお腹がおおきくなった。

さて、女は(男の姿をすると) 王さまに、「もうながいあいだいました。わたしはかえります」といった。

さて、王さまは女に別れをいった。女はかえつていった。女は自分の夫の屋敷にかえつていった。ウマのお腹がおおきくなつていき、王さまのウマそっくりの子をうんだ。女のお腹もおおきくなつていき、王さまそっくりの子どもをうんだ。

さて、十ヶ月たつと、王さまはたちあがり、かえつてきた。王さまがもうすこしでかえつてくるといふとき、道すがら、人びとは、「あなたそっくりの子どもがうまれました。あなたのウマそっくりのウマがうまれました」といった。王さまは、「うそだ」といった。王さまはこの人たちに、旅先であつた王さまとわかれるとき、王さまに記念として、指輪をやつたという。

さて、女はその指輪を自分のところにおいておいた。王さまが家

についたとき、王さまが屋敷にはいるまえに、人びとは子どもをだきあげると、王さまにみせた。女は王さまにもらった指輪を子どもの指にはめておいた。王さまはとおくから子どもをみると、まず指輪のことに気づいた。王さまが屋敷につくと、自分のウマそっくりのウマがでてきた。

さて、王さまはほかのよめさんたちをすべて、離縁した。王さまは自分のいいつけをまもったよめさんだけをあとにのこしたとき。お話はみじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二〇日、語り手 ハデーージャ・ブーバ、ガウ
ンデレにて)

